

エドワード・ゴリーを巡る旅

Journey to the World of Edward Gorey

2023年4月8日(土) - 6月11日(日)



①『うろんな客』原画 1957年 ペン、インク、紙 ©2022 The Edward Gorey Charitable Trust

不思議な世界観と、モノトーンの緻密な線描で、世界中に熱狂的なファンをもつ絵本作家エドワード・ゴリー (Edward Gorey, 1925-2000)。近年、日本でも『うろんな客』『不幸な子供』などの絵本が次々と紹介されてきました。ゴリーは、自身がテキストとイラストの両方を手がけた主著 (Primary Books) 以外にも、挿絵、舞台と衣装のデザイン、演劇やバレエのポスターなどに多彩な才能を発揮しました。本展は、そんな作家の終の棲家に作られた記念館・ゴリーハウスで開催されてきた企画展から、「子供」「不思議な生き物」「舞台芸術」などのテーマを軸に約250点の作品で再構成するものです。米国東海岸の半島に残る古い邸宅へと旅するように、遠視したクールな死生観を持つ謎めいた作品との邂逅をお楽しみください。

This Exhibition has been planned and originally curated by the Edward Gorey House with the official permission of the Edward Gorey Charitable Trust.

◆ 記念講演会「うろんな絵本作家 エドワード・ゴリー」

4月22日(土) 午後2時~(約90分)、地下2階ホール

講師：柴田元幸氏 (エドワード・ゴリー翻訳者、東京大学名誉教授)

* 無料 (要入館料) * 定員50名

記念講演会申し込み方法

往復ハガキまたはメール (event@shoto-museum.jp) に下記の1~4までの必要事項をお書きのうえ、「ゴリー展記念講演会係」までお申し込みください。

1. 郵便番号 2. 住所 3. 氏名 (ふりがな) 4. 日中連絡のつく電話番号

* 切は4月10日(月)必着。*1通につき1名または1回のお申し込みにつき1名のみ申し込み可。

* 迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に予約完了メール「@airrsv.net」と当館からのメール「@shoto-museum.jp」が受信できるようにドメイン設定をお願いいたします。

◆ 開催概要

展覧会名 エドワード・ゴリーを巡る旅 Journey to the World of Edward Gorey

会期 2023年4月8日(土) - 6月11日(日) ※会期中一部展示替わり

開館時間 午前10時~午後6時 (毎週金曜日は午後8時まで) *入館は閉館時間の30分前まで

入館料 一般1000円(800円)、大学生800円(640円)、
高校生・60歳以上500円(400円)、小中学生100円(80円)

* リピーター割引: 観覧日翌日以降の本展期間中、有料の入館券の半券と引き換えに、
通常料金から2割引きでご入館できます。

* () 内は団体10名以上、渋谷区民の入館料 * 土・日曜日・祝休日は小中学生無料

* 毎週金曜日は渋谷区民無料

* 障がい者及び付添の方1名は無料

休館日 月曜日

主催 渋谷区立松濤美術館

特別協力 エドワード・ゴリー公益信託、
ゴリーハウス (ケープコッド)

協力 株式会社 河出書房新社

企画協力 株式会社イデッパ

会場 渋谷区立松濤美術館 〒150-0046 東京都渋谷区松濤 2-14-14

電話: 03-3465-9421 HP: <https://shoto-museum.jp>

交通案内

● 京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分

● JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分 ※駐車場はございません



◆ 報道関係のお問い合わせ

広報担当：西・木原・野城 (pr-sma@shoto-museum.jp) 展覧会担当：平泉

電話：03-3465-9421 FAX：03-3460-6366

* 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。

* 画像のご利用後、データは破棄してください。

* 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとさせていただきます。

* 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。

◆ 次回展覧会のご案内 私たちは何者? ボーダレス・ドールズ

The Infinite World of Japanese Dolls: From Religious Icons to Works of Art

2023年7月1日(土) - 8月27日(日)

エドワード・ゴアリーとは何者か

1925年シカゴに新聞記者の息子として生まれる。飛び級を繰り返す早熟な少年時代を送る。17歳の頃シカゴ・アート・インスティテュートで半年だけ美術を学んだ後、第二次世界大戦中はアメリカ陸軍で兵役につく。除隊後、ハーバード大学で仏文学を専攻。1953年、ニューヨークの出版社ダブルデイ社に就職してブックデザインを担当。この頃、最初の絵本を刊行する。いくつかの出版社勤務を経て、1962年、自身の出版社ファントッド・プレスを立ち上げ、また翌年からは専業作家となる。韻を踏んだ詩的な文章、モノクロームの緻密な描線、19世紀のイギリス文学を彷彿とさせる厚重で独特の世界観をもつ多くの絵本を生み出す。また文学やバレエ、映画などを熱烈に愛好して深い造詣を持ち、多数の挿絵や、演劇のポスター、舞台美術等も手がけた。2000年4月死去。日本では同年の秋、柴田元幸氏の翻訳による初の単行本絵本が刊行され、若い世代を中心に高い人気を獲得、以後毎年のように刊行が続く。

展覧会構成

◆第Ⅰ章 ゴアリーと子供

ゴアリーには『不幸な子供』をはじめ、幼児や子供が主人公となる本がいくつもあります。一見、悪い子には報いがあると説くヴィクトリア朝の「教訓譚」の「型」をなぞるように、子供たちには、つぎからつぎへと悲劇や試練が降りかかります。けれど、従来の子供話と大きく異なるのは、わたしたちの予想を大きく裏切り、これらが安直なハッピーエンドを迎えるわけでも、勧善懲悪的などんでんがえしがあるわけでもないことです。良い子でも悪い子でも関係なく、あっけない死、あるいはただの不幸に終わる、突き放したクールな視点の「現代のおとぎ話」は、逆になぜこうも多くの人々の心をとらえるのでしょうか。そこには20世紀アメリカの何ん自由ない平凡な日常生活を送っているように見えながら、水面下で決して平坦ではない家庭や世界のなかで生き抜き、成長した、感性豊かなゴアリーの子供時代との関係があるのかもしれませんが。本章では、ゴアリー自身の幼少期の作品も含めて、子供をテーマとした作品を特集します。

◆第Ⅱ章 ゴアリーが描く不思議な生き物

ある日突然、家に入り込んできたまま、居座り続けて困ったことばかりする『うろんな客』のなかの黒い生き物。長い鼻、足にはスニーカー。名前もなく、正体不明ながら忘れられない印象を残します。

『狂乱怒濤 あるいは、ブラックドール騒動』に登場するフィグバッシュは、黒い鳥に似た手足の長い生き物で、他のスクランプ、ナイーラー、フーグリブーといういずれも個性豊かな他のキャラクターとともにいたざらばかりしています。彼(?)のことを、作者はお気に入りだったのか、「ブラックドール」という他のキャラクターと同様、ポスターや他の作品のなかにも度々登場させました。

『音叉』で少女が海の底で出会う巨大な怪獣は、恐ろしいけれど、少女の話を親身に聞いてくれる守り神のような存在でもあります。

いずれの生き物も、一見、不気味な様相ながら、どことなく人間臭く、ユーモラスで愛嬌があり、独特の世界感を作り出しています。この章では、作品の大きな魅力となっているゴアリーが生み出した架空の生き物たちを特集します。絵本の原画とともに、キャラクター設定のための鉛筆のスケッチやドローイングなども展示します。



②『不幸な子供』原画 1961年 ペン、インク、紙



③『うろんな客』原画 1957年 ペン、インク、紙



④『狂乱怒濤』原画 | 1987年 | ペン、インク、紙



⑤『音叉』原画 1990年 ペン、インク、紙
②~⑤すべて ©2022 The Edward Gorey Charitable Trust

◆第Ⅲ章 ゴアリーと舞台芸術

ゴアリーは20代の終りにニューヨークに移住すると、ニューヨーク・シティ・バレエの公演に通いつめ、振付師ジョージ・バランシンを敬愛。1956年頃からはほぼ全ての公演を観たといわれ、バレエを主題にした絵本も生み出しています。

1970年代には、ブロードウェイでも上演されたミュージカル劇『ドラキュラ』の総合的デザインを任せられ、演劇界での最高の栄誉のひとつトニー賞の衣装デザイン賞を受賞します。

1983年のバランシンの逝去後、ボストン近郊の半島ケーブコッドに移りますが、この地でも、地元の演劇の舞台デザインやポスターを手がけ、人形劇などにも携わりました。

ところで、ゴアリーのアメリカでの知名度は、様々なイギリスのミステリー・ドラマを放映している専門チャンネル『ミステリー!』のオープニング・アニメーションによるところが大きいのです。本章ではこうしたゴアリーと舞台美術やテレビ、映画などとの関わりを紹介します。

◆第Ⅳ章 ゴアリーの本作り

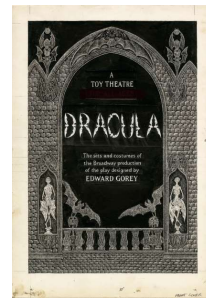
ゴアリー作品は、同じタイトルでも箱入りの限定版が出版されたりと、出版にあたり複雑な仕様が凝らされました。作画は、スケッチした後、お気に入りの「ヒギンズ」のインクに「ハント」の細いペン先を用い、職人のように緻密に仕上げ、タイトル等のロゴやテキストの文字も手書きで、出版される際のサイズで制作していました。本作りの基礎にあるのは、乱読していた19世紀から20世紀初頭にかけての英米の本。イギリスの詩人で画家のエドワード・リア(1812-1888)からは、青年時代にドローイングの様式を真似るほど強い影響を受け、後年挿絵をつけたリア原作の『ジャンプリーズ』は、自身の代表作ともなっています。この章ではそのこだわりの本作りと影響を受けた古典名作を取りあげます。

◆第Ⅴ章 ケーブコッドのコミュニティと象

晩年にゴアリーが居を定めたケーブコッドの古い家「ゴアリーハウス」。ゴアリーはここで象をテーマにした不可思議で内面的な版画作品を作り続けました。これらは、彼が辿り着いた新天地として評価されています。ゴアリーを巡る旅のしめくりに最晩年の版画作品と同地でのゴアリーの暮らしの様子を紹介します。

ゴアリーハウスとは

ボストン近郊の風光明媚な半島、ケーブコッドにある、19世紀に建てられた築約200年の古い邸宅。ゴアリーがニューヨークから移り住み、1986年以降、終の棲家として、活動の拠点とした。その様相から、「エレファント・ハウス(象の家)」という愛称も。ゴアリーの生前は、多くの飼育猫たち、2万5千点を超える蔵書や収集した美術品やさまざまなモノでいっぱいのワンダーワールドとなっていた。死後は当時の雰囲気を保ちつつ記念館として公開され、原画や資料による展覧会を定期的で開催している。



⑥『ドラキュラ・トイシアター』表紙・原画 1979年頃
インク、紙



⑦『舞踏(舞踏のようなバレリーナ)』年代不詳
ペン、インク、紙



⑧『静い時』草稿 1975年 ペン、インク、水彩、紙



⑨『ジャンプリーズ』原画 1968年 ペン、インク、紙
⑥~⑨ すべて ©2022 The Edward Gorey Charitable Trust

会期中イベント情報(事前予約不要)

◆展覧会担当芸員によるギャラリートーク

4月14日(金)、4月23日(日)、5月20日(土)
午後2時~、約40分間

*無料(要入館料)

◆館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

4月14日(金)、4月21日(金)、4月28日(金)、
5月5日(金・祝)、5月12日(金)、5月19日(金)、
5月26日(金)、6月2日(金)、6月9日(金)

各日午後6時~、約30分間

*無料(要入館料) *各回定員15名